

南信州エコツーリズム推進協議会

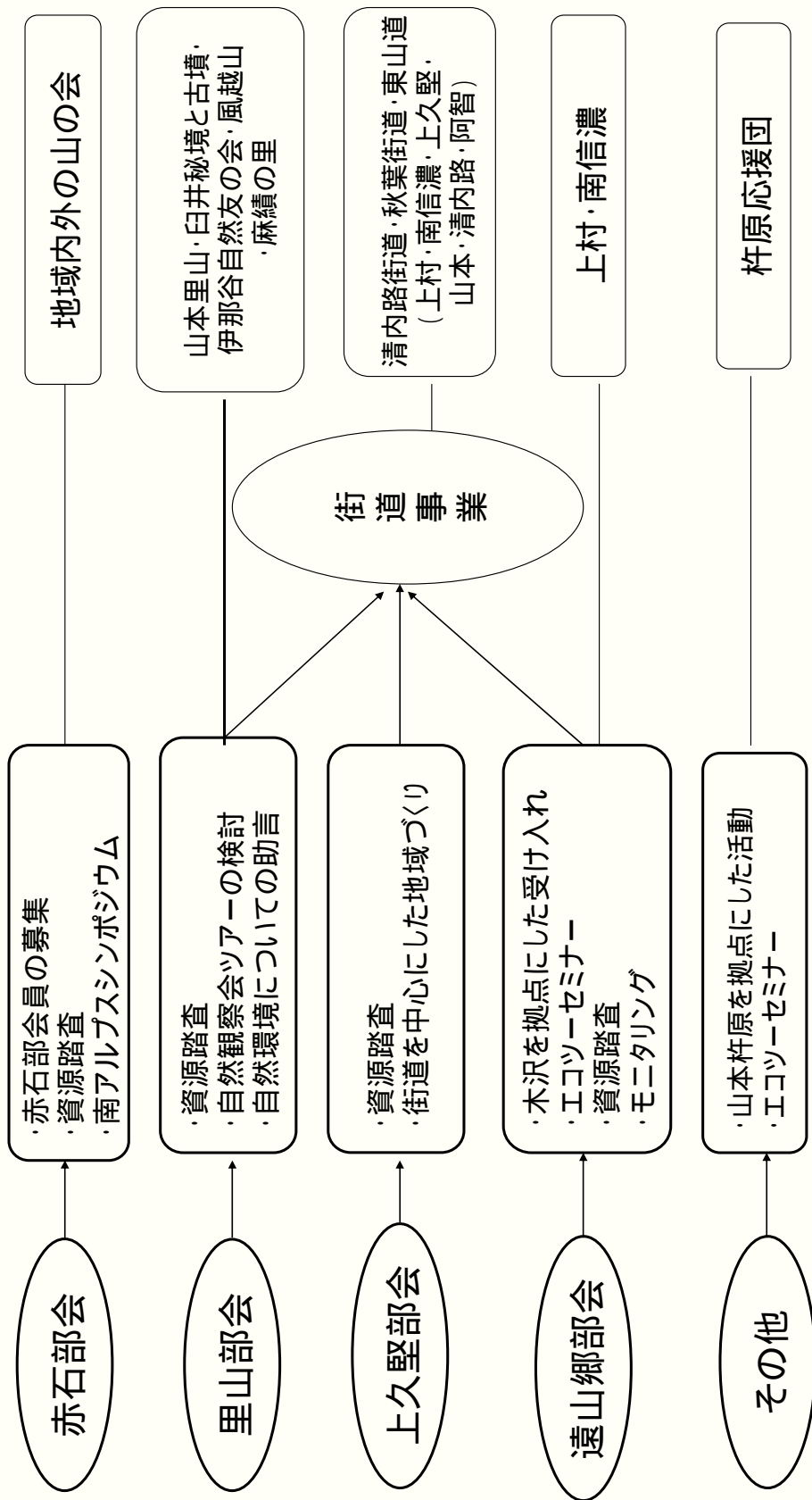
平成17年度 事業概要

H17年度 各部会活動について

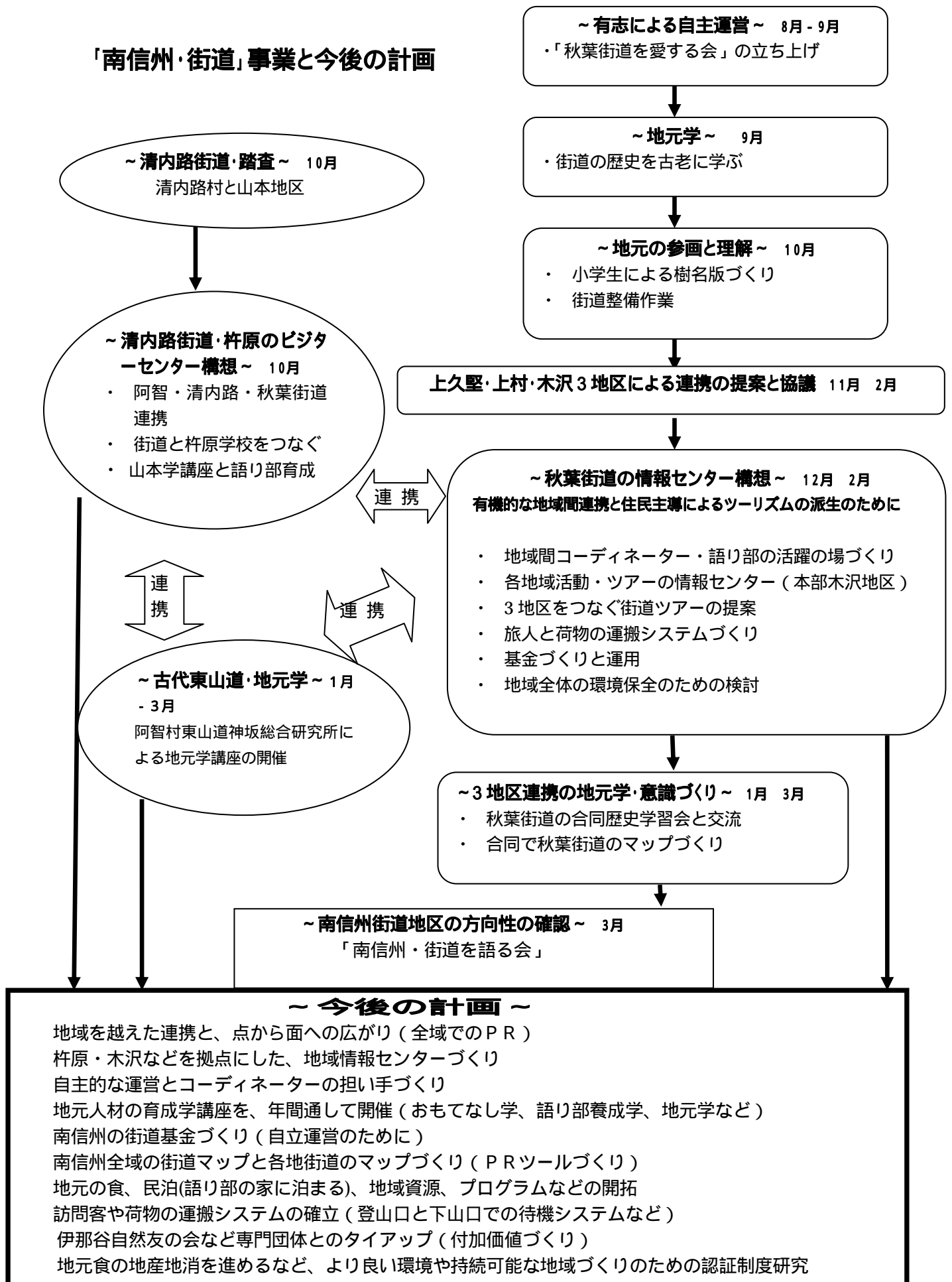
各部会

活動の概要

関わりのあった地区・団体



「南信州・街道」事業と今後の計画

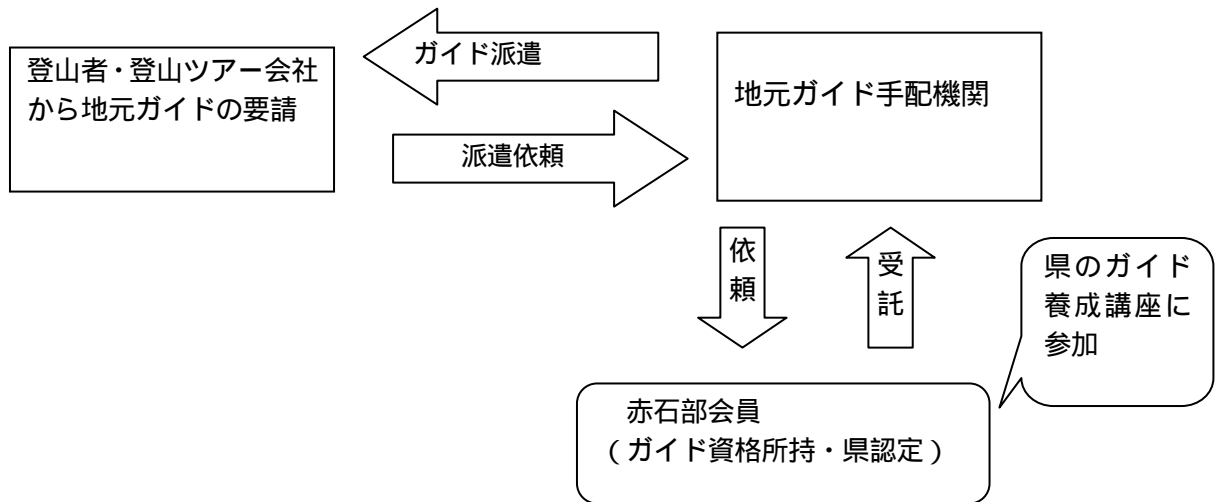


「赤石部会」 事業と今後の計画

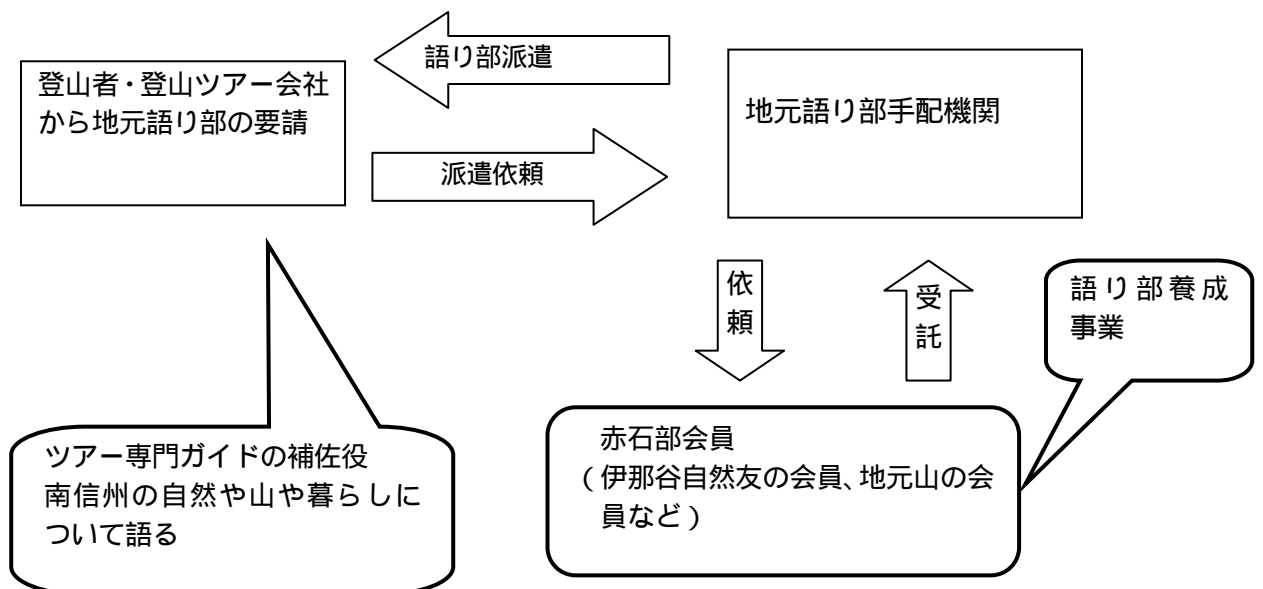
赤石部会とは・・・

これまで各々に山を楽しんでいた山岳関係個人や団体が集まり、この地域の山々を末永く保全し、楽しみ、負荷をかけない登山活動とその仕組みを、共に考えていく集まり。

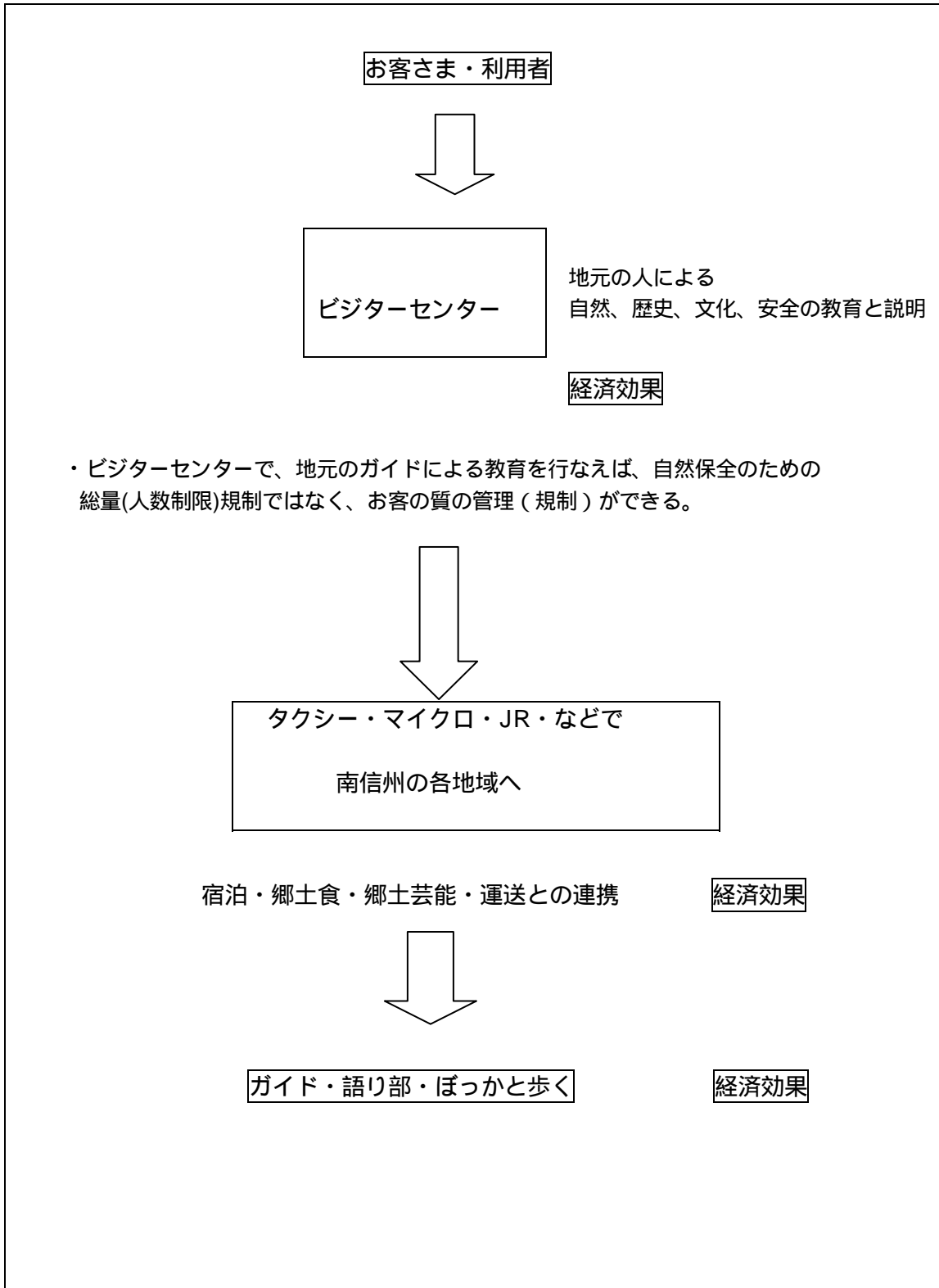
地元ガイド(ツアー責任者としてのガイド)が活躍できる場を作り、若者の雇用の場としていく。



自然や地域の暮らしに詳しい地元の語り部(主たるツアーガイドに補助的に付く語り役)がつくことで、南信州地域の自然・文化・暮らしの関心を高め、より楽しい登山を提供する。また、山頂を目指すだけではない登山、里山での楽しみも知ってもらう。



ビジターセンターの設置(既にある旧木沢小学校・旧杵原中学校など)と、しくみづくり
登山者は、ビジターセンターにて、自然保全や南信州地域について学んでから、入山する。



南アルプスの価値を十分認識して、その魅力と大切さを、地元から全国へ発信していく。

今後、山の大切さと素晴らしさを多くの人に知ってもらえるように、地元住民が参加する登山を継続的に行っていく。

- ・ 既にある地元の山の会で主催する登山イベントを広くPRする。
- ・ 地元の山の会で提案する登山ルート作成
- ・ 地元の山の会主催の清掃登山

地元中学校の学校登山を誘致して、子どもたちに山の素晴らしさを伝えていく。

自然保全のためのルール(テント場の設定、水場の保護、し尿やゴミ問題の改善など)を提案。

- ・ ペットを山に入れないように、統一した看板標識づくりと法的な禁止措置
- ・ キャンプ指定地以外でのキャンプ禁止
- ・ 環境実態調査(キャンプ指定地、水場、し尿やゴミ、盗掘)

各団体や関係者の情報交換をしながら、より地域に根ざした活動をしていく。

ガイドや語り部の育成を行う。

伊那谷自然友の会員を講師に、自然について学ぶ。

「地元の語り部の養成」 今後の計画

赤石部会事業や、街道事業などで語り部の育成が以下のように計画されている。

飯田市上久堅地区 秋葉街道を愛する会での育成計画

- ・外部要請のツアーには随時応じるようにして案内人は都合が付く者が行なう
- ・案内人は「ツアーの目的、注意事項、安全確保、感動の与え方」について学習する
- ・事務所は当面、個人宅として外部からの連絡、文書の作成、配布を行なう
- ・会はあくまで興味のある人、参加したいと思う自主的な人の集まりとする
- ・楽しく学習が出来て自主的な行動が出来て少し汗のかける会に心がける

	ツアー実行日 毎月第二日曜日	語り部・勉強会・調査 毎月第3日曜日	外部からのツアー 受け入れ等
4月	街道散策ツアー	植物生息調査	当番は交代制
5月	山菜料理ツアー	植物生息研究会	通年の案内人確保
6月	街道散策ツアー	街道歴史研究会	案内人の学習会実施
7月	街道整備ツアー	今後の事業話し合い	
8月	樹名盤取り付けツアー	街道歴史学習会	随時会合を開催
9月	街道整備ツアー	街道歴史勉強会	
10月	キノコ狩りツアー	樹木踏査	
11月	登ろう会ツアー	樹木の勉強会	
12月	冬山トレッキングツアー	紅葉の勉強会	
1月		食品特産物勉強会	
2月		特産化食品の実習	
3月		来年度事業の立案	

阿智村 住民一芸員阿智学講座計画

地域の宝を発見して学ぶため、また阿智村に生きる価値を見出し、阿智の土地の息づかいを肌で感じるための「阿智学」をつくるための講座を計画している。

社会科学講座	日本史（日本通史、下伊那史、阿智村市） 考古史（縄文、弥生、古墳、奈良、平安、中世、近世、貿易陶磁器と東山道、神坂、杉の木平） 古文学（記紀、万葉、漢詩、源氏物語、枕草子、新古今和歌集、今昔物語、中世の文学（謡曲ほか、伝説、説話） 古文書解説（園原末代鑑、朱印状ほか） 民俗・芸能（木槌薬師、木賊獅子、義士踊り、年中歳時記）
自然科学講座	地形・化石（日本の地形構造と大陸史、長野県、下伊那の地形・地質、河川争奪の地形、昼神・清内路峠断層の確認、三紀層の発見と踏査） 植物観察会（春・夏・秋・冬、巨木めぐり） 動物観察会（クマ、イノシシ、サル、カモシカ、タヌキ、チョウ、サカナ、カイ、両生類） 天文・気候（星座観察、風向き、霧、雨）

ボランティア講座	ボランティアガイドの方法（現地での案内の仕方、ガイド育成） 一言阿智案内講座 地域観光資源（宝）発見ウォーキング（農家のつくる一品料理、景観）
----------	---

飯田市山本地区 杵原応援団

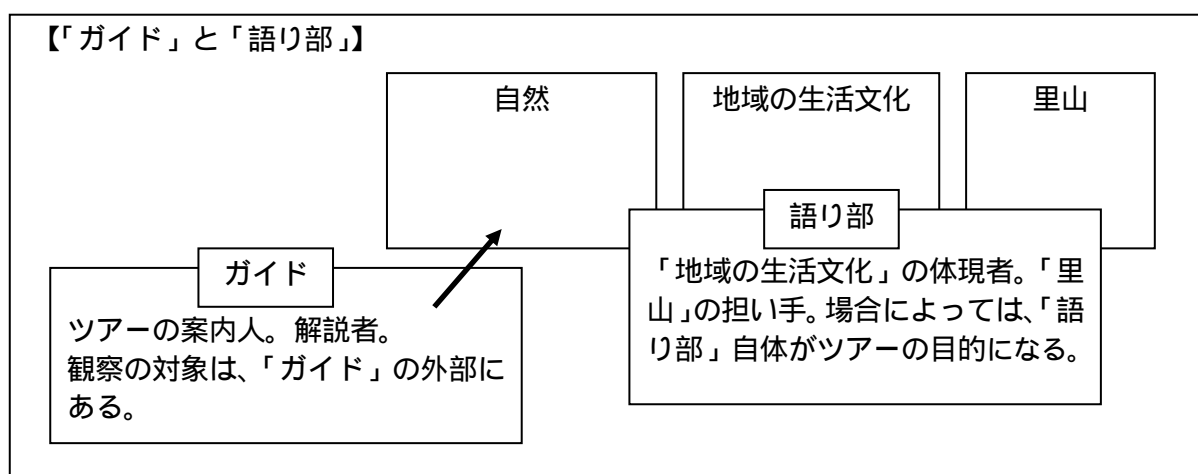
旧杵原中学校を拠点にして、地元をしっかりと学ぶため山本学講座を行い、誇りをもって地元を案内できる地域にしていく。

山本学講座を今後開催。

南信州全域で今後必要な「語り部講座」の内容

- ・ 地元語り部の意義と在りかた
- ・ 里山の楽しみ方
- ・ プログラム中の安全確保と救急法について
- ・ 環境への配慮について
- ・ 自然保全のあり方と伝え方
- ・ おもてなし学
- ・ プログラムの魅力づくり
- ・ 案内のためのツールづくり など

「ガイド」と「語り部」の位置づけと考え方



「地域情報連絡会」で出された意見や提案

「地域情報連絡会」の体制について

各地域が自主的にエコツーリズムに取り組むために、導入期に様々な議論や資源踏査などを行ってきたが、更に取り組みの活性化を図るため、「地域情報連絡会」を推進協議会の中に位置づけた。

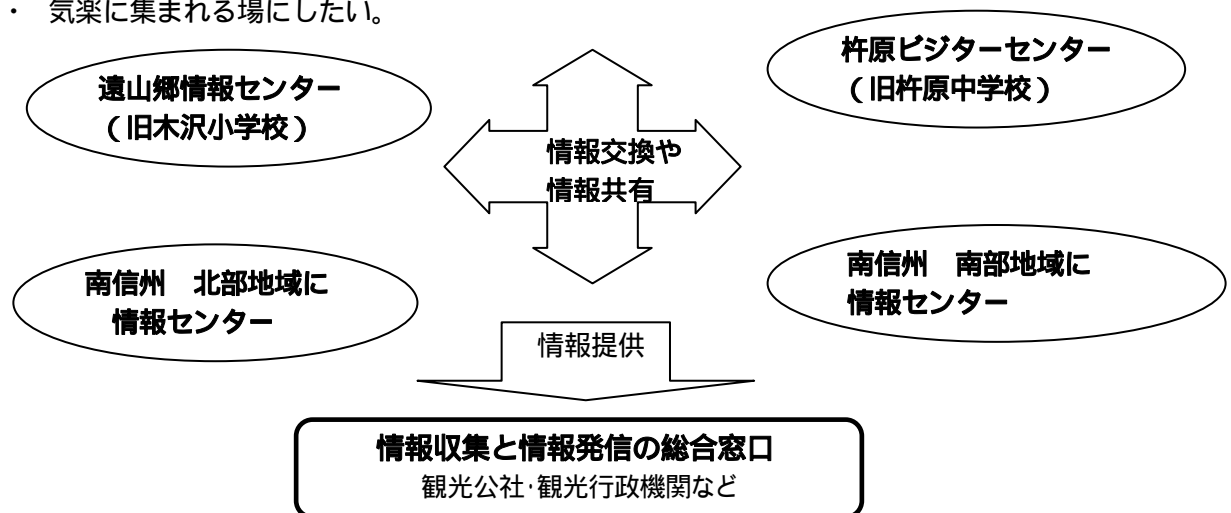
今後は・・・

- ・ 地域を越えた連携を行うための組織を検討する。そのため、現在の「地域情報連絡会」をより自立した形にしていく。
- ・ 地域訪問者やツアー参加者の費用の一部が、地域保全の基金となる仕組みと制度づくりを行っていく。地域のファンの増加が、地域の魅力の増加につながるように。
- ・ 認証制度の憲章づくりをすすめていく。ツーリズムによる地域づくりが、乱開発でなく、環境保全とつながるように。
- ・ 積み立てた基金を、自主的な運営や、保全活動や整備活動に使っていく。
- ・ 木造校舎の旧杵原中学校や、旧木沢小学校などを拠点とした、地域情報センターをつくる。

南信州・情報センター構想 ～地域丸ごとビジターセンター機能～

各地域の情報センターに、このような機能を持たせたい・・・

- ・ 地域間コーディネーターの役割（自主的な運営とコーディネーターの担い手づくり）
- ・ 地域の情報が集まる場にしたい。
- ・ 地域の情報を発信できる場にしたい。
- ・ 語り部を登録し派遣（語り部業の成立）
- ・ 訪問者や地元住民の学び舎として活用。
- ・ 手作りの展示をして地域紹介の場にしたい。
- ・ 地元物産の販売をする。
- ・ 気楽に集まれる場にしたい。



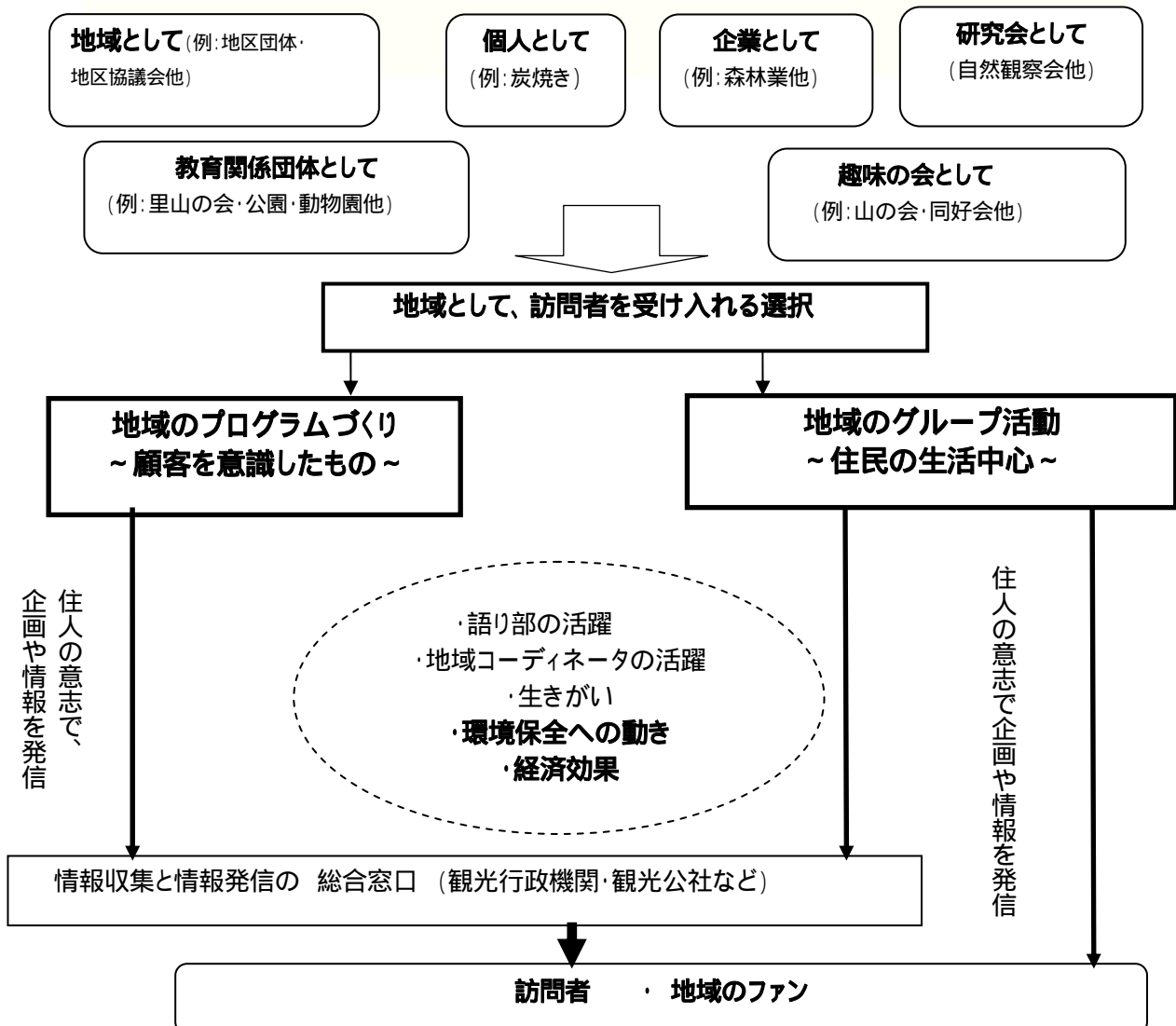
- ・ 各地域の拠点施設を有効に活用する。地域内の人や活動をつなぎ、地域の総合コーディネート機能を持たせることで、その地域ならではの付加価値を創り出す。
- ・ 各地の「丸ごと博物館」的な構想で進めたい。

飯田型ツーリズムについて

資源「暮らし・営み」を、資産に変えるために・・・

～各地域で求めているもの 協議会の役割

- ・ 魅力ある地域環境・活動にしていくため、**専門家・外部の助言が必要**。
ニーズにあった専門的助言を提供。
- ・ 「行政や担当者が、プログラムや保全ルールを作るのではない。
住民一人一人が主役。住民参加により、創りあげていきたい。」
地域の意欲を引き出す・地域と連携
- ・ **住人の意思と選択**で、地域を発信したい。
地域のペースと意思を大切に
- ・ 各地域、各団体を超え、もっと**広い範囲でつながりたい**。
架け橋になる・情報交換の場をつくる



- ・「地域力」をベースにした「飯田型ツーリズム」には、大きく分けて2つのスタイルがあることが議論されてきた。
- ・2つのスタイルのうち1つは、最初から顧客を意識して地域資源を「プログラム商品」として磨きあげて発信していくものである。(ネイチャーツアーなど)これは、プロガイドの力量が顧客満足度に大きく影響する。
- ・2つめは、これまでの自分達の暮らしの楽しみに、外部の者が参加するというものである。これは、住民の楽しみに「参加をどうぞ」というスタイルなので、住民の生活ペースで受け入れを行うことになる。この場合は、素朴な暮らしの営みや住民の飾らない語り、また受け入れる地域の質の高さが魅力となり、客の満足度となる。
- ・どちらのスタイルにせよ、地域に訪問者が訪れることにより経済効果は生じる。
- ・資源を資産に変えるために、どちらのスタイルを選択するのか、あるいは融合させていくのかは、各地域が決めていくことである。
- ・また、外部者を受け入れるか、そうでないかも地域が決めていく。
- ・「地域にとって、何が大切なのか」今までの価値観を見直し、大切なものを保全していくために、あらたな価値観に基づいたしくみづくりが必要だ。
- ・これまで各地で盛んな「交流活動」「公民館活動」が、「ツーリズム」として地域に根付くためには、語り部としての活躍の場や、地域内の人をつなぐ役割(コーディネーター)が必要である。地域拠点を情報センターにする構想も、ここから生まれている。
- ・人や資源をつなぎ、発信していくことを住民が意識し、自ら担うことで、力がつき「人づくり」にもつながっていく。シナリオのない試行錯誤を通して、それぞれの住民に参画意識と、資源を資産にするためのノウハウが残っていく。それが「持続可能なツーリズムづくり」に結びつくのではないか。
- ・多くの人を誘客することや、訪問客に軸足を置いた満足度を求めるよりも、ツーリズムにより、住む人が育っていくことを意識し、地域の自然環境がより良くなる地域づくりとしての「飯田型ツーリズム」でありたい。結果として「住んで良いまちは、訪れて良いまち」になる。

地域情報連絡会では、以上のような議論がなされてきた。

モデル事業 3カ年の流れ (経過と計画)

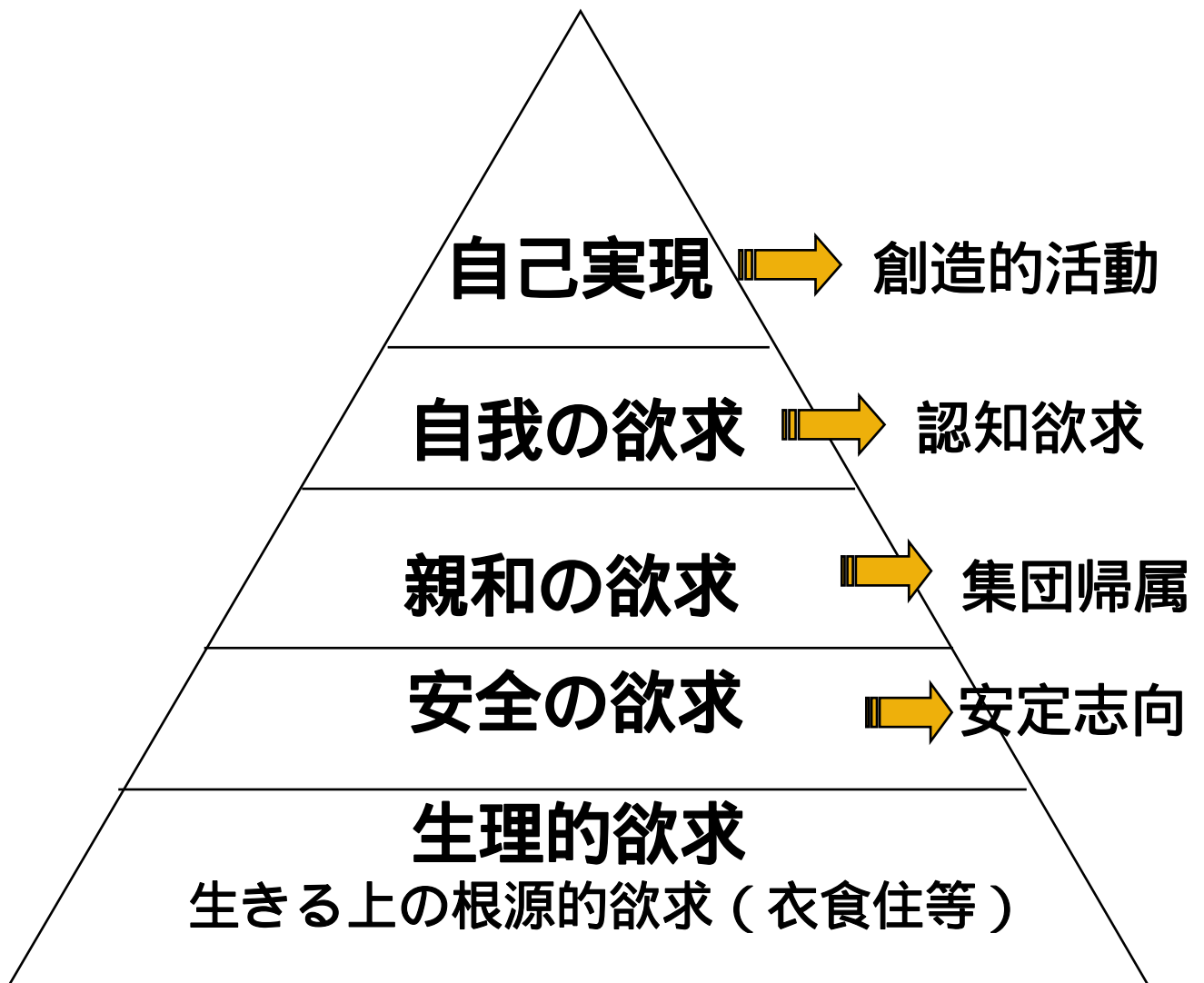
年度	推進体制	エコツーリズムへの理解	地域認証制度づくり		人材育成	地元学	プログラム開発 (各都会)	山岳地帯の保全と活用 (赤石都会)	情報発信ツールの作成	マーケットの開拓	
			地域の環境に対して	ツアー・プログラムに対して							
平成16年度	<ul style="list-style-type: none"> 研究員中心に全国大会 	<ul style="list-style-type: none"> キックオフシンポジウム～飯田のエコツアーが目指すもの～ 全国大会～地元を知る、仲間を知る～ 研究員から地域課題と取り組みたいことの提出 	<ul style="list-style-type: none"> 地域環境や保全についての座談会 保全協力金制度についての検討 地域認証制度にむけたセミナー開催 	<ul style="list-style-type: none"> 保全のためのルールについてアンケート実施 	<ul style="list-style-type: none"> 語り部養成講座準備 	<ul style="list-style-type: none"> 各地域での資源踏査 地元学講座の開催 	<ul style="list-style-type: none"> 各地域資源の磨きだし 自然観察会のツアー検討 マップづくり 街道の活用推進 	<ul style="list-style-type: none"> 南アルプスシンポジウムの開催 赤石都会ネットワークづくり 山岳地帯の保全についての検討会 地元ガイドの活用について 			
平成17年度	<ul style="list-style-type: none"> 地域情報連絡会の立ち上げ エコツアー推進の地域拠点の模索 	<ul style="list-style-type: none"> エコツーリズムセミナーの地域認証制度に向けて) 	<ul style="list-style-type: none"> 地域環境や保全についての座談会 保全協力金制度についての検討 地域認証制度にむけたセミナー開催 	<ul style="list-style-type: none"> 各地域での資源踏査 地元学講座の開催 	<ul style="list-style-type: none"> 語り部養成講座(定期的) 山岳ガイドの養成 	<ul style="list-style-type: none"> 各地域での資源踏査 地元学講座の開催 	<ul style="list-style-type: none"> 各地域資源の磨きだし 自然観察会のツアー検討 マップづくり 街道の活用推進 	<ul style="list-style-type: none"> 南アルプスシンポジウムの開催 赤石都会ネットワークづくり 山岳地帯の保全についての検討会 地元ガイドの活用について 			
平成18年度	<ul style="list-style-type: none"> 地域情報連絡会の体制強化 エコツアー推進基本の検討 今後の基本計画の策定 	<ul style="list-style-type: none"> エコツーリズムセミナー各地域で開催 	<ul style="list-style-type: none"> 地域環境や保全についての座談会 保全協力金制度についての検討 地域認証制度にむけたセミナー開催 	<ul style="list-style-type: none"> 各プログラムをエコ的にするための検討 	<ul style="list-style-type: none"> 語り部養成講座(定期的) 山岳ガイドの養成 	<ul style="list-style-type: none"> 各地域での資源踏査 地元学講座の開催 	<ul style="list-style-type: none"> 各地域での資源踏査 地元学講座の開催 	<ul style="list-style-type: none"> 各地域資源の磨きだし 自然観察会のツアー検討 マップづくり 街道の活用推進 	<ul style="list-style-type: none"> 地元山の会登山ツアー実施 学校登山誘致 ガイド語り部登録と、ピジターセンター試行 整備登山 保全ルール周知 現状踏査 	<ul style="list-style-type: none"> 各地域の情報やツアーのパンフレットづくり 	<ul style="list-style-type: none"> 地域のフアンの獲得 マーケットの開拓
目指す姿	<ul style="list-style-type: none"> 各地域拠点におけるコーディネート機能の継続と移行組織の策定 	<ul style="list-style-type: none"> 各地域・団体におけるエコツアー推進の動きの増加 	<ul style="list-style-type: none"> 地域認証制度の創設(環境保全・地産地消増進など) エコのプログラム・ツアーの増加 自然保全や景観保全を意識した生活への動き 	<ul style="list-style-type: none"> 各団体の多様なプログラムの実施 	<ul style="list-style-type: none"> 地元語り部養成講座の定期的な開催 多くの地元語り部の活躍 	<ul style="list-style-type: none"> 各地区での資源の活用と保全推進 	<ul style="list-style-type: none"> 各団体の多様なプログラムの実施 	<ul style="list-style-type: none"> ゾーニングガイドネットワークづくり 地元ガイドツアー実施 自然保全のルール策定 伊那山脈周辺でのエコツアー実施 ピジターセンターでの保全教育活動 	<ul style="list-style-type: none"> エコツアープログラムのパンフレット作成 ITでの情報発信 	<ul style="list-style-type: none"> マーケットの拡大 	
効果	<ul style="list-style-type: none"> 自立的な地域拠点 ツーリズムによる持続可能な地域づくり 	<ul style="list-style-type: none"> 各地域でのエコツアー推進 	<ul style="list-style-type: none"> 地域環境保全と質の高い地域づくり 地域のブランド化 	<ul style="list-style-type: none"> 観光と保全の両立 	<ul style="list-style-type: none"> 雇用の場の増加 	<ul style="list-style-type: none"> 地元への誇り 	<ul style="list-style-type: none"> 各地域の新産業の芽生えと活性化 経済効果 	<ul style="list-style-type: none"> 南アの保全と活用の動き 	<ul style="list-style-type: none"> マーケットの拡大 フアンの獲得 		

【エコツーリズムの実現へ向けての現状認識】

1. 「双方の意識づくり」

マズローの欲望段階説

人の行動は社会状況、経済活動の進展に伴って、自己実現、知的欲求探求、癒しなど高質なものにシフトしていく。



エコツーリズムとマストツーリズムの違いについて、前ニュージーランド政府観光局日本局長小林天心氏(現NPO法人ふるさと南信州緑の基金理事長)は、下記の通りに分析している。

エコツーリズムの条件

- (1) 少人数。
- (2) 時間的に十分余裕のある日程。
- (3) なるべく自分の足を使う。
- (4) 地域の自然や文化に詳しい解説者がつく。

- (5) 地域に対する経済効果の還元を十分意識する。
- (6) 環境・文化に対する負荷をかけない。
- (7) 五感を動員して自然や文化、人との相互交流を深める。
- (8) 自然に対する感謝の気持ち文化に対する敬意をわきまえる。

マストツーリズムの負のインパクト

大量の団体客が特定の観光名所などに集中することによって

- (1) 自然環境の破壊
- (2) 文化遺産の劣化
- (3) 伝統文化の誤用や悪用
- (4) 地域社会における階層分化
- (5) 犯罪や売春の増加
- (6) 町並みの陳腐化
- (7) 人心の荒廃

訪れる人たちが無意識的に傲慢であれば、迎える人たちも「カネが儲かる」とばかりに慇懃無礼になるか、へつらうだけで相手に対する尊敬の念は生まれにくい。例えば片方が敬愛の対応をしたなら片方に変化が生じるのが一般的な姿であり、双方がそうした気持ちを含むならば、その関係は増幅して更に充実感や気持ちの良さ、さらに発展へと続く筈である。人間の意識はマズローが分析した通り、衣食住と言ったベーシックな欲求から、より高質かつ自己実現の欲求に向かっており、エコツーリズムの理念と手法は、高質かつ持続可能な地域づくりのために観光の経済効果と受け入れる人の心、自然保護を融合していくものである。その良好な人間関係は、その実現に向けて情操や道徳といわれる諸々の教育が基本となるのではないだろうか。

エコツーリズムを認識してもらうには時間が必要である。また、マストツーリズムになれた人たちにエコ理念を浸透させるのは相当の覚悟と根気が必要である。まず「お金を払うのだから」という意識を「お金を出して価値あるものに触れさせていただく」という方向に向かわせなくてはならない。受け入れ側は当然、価値あるものの創造に努めなければならないし、気持ちよく迎え入れる意識を確立しなければならない。この二つの意識を確立するだけでも至難の業であり、この意識を変えることだけでも成功と言える。例えば、「道端に咲く山野草を踏み荒らさない」などはモラルの問題で、できないとすればその人間性を問うまでにいたるだろう。

2. 「無意識の意識化」

飯田市は小規模な観光地の集積である一方、自然、歴史、民俗文化、食、伝統的な暮らし等の宝庫である。これらの観光資源を「活かす、殺す」は、まとめ方次第である。受け入れる側の体制として利用する施設や交通の整備、心構えは当然、エコツーリズムの理念を持ったガイドの存在は必須である。

ガイド養成については、当地域は非常に高齢化率が高く、本報告書内でも述べているように飯田市は25.9%、周辺町村は20~30%台を推移し、下伊那郡天龍村においては県内85市町村のうち最高値となる49.1%を65歳以上が占めるといふ地域構成においては危機的な状況にある。しかし、高齢化率が高いということは経験と実績を兼ね備えた人たちが、現役を退いて余暇のある状況にあるという環境でもあり、生涯現役の幸福感があるとすれば、これらの立場にある人のエコツーリズムにおけるガイドとしての位置づけは重要視される。

繰り返すが経験と実績を兼ね備え、人間としても熟成された人々はその存在自体が尊い。観光の形態によっては若いガイドが要求される場面もある。しかし、もしもこの高齢といわれる年齢層の皆さんがガイドとしての役割を果たしてくれるとすれば、エコツーリズムの理念実現に少しでも接近できる可能性が高い。来る側の人々にとっては飯田・下伊那地域の様々な環境自体が観光の目的であり、無意

識に暮らしている住民をガイドに養成する場合は、まず、ありのままの環境自体に価値観を見出し、再認識していただくところからはじまる。ある種のプライドや誇りといった目には見えない意識を養うことで意欲を増進させて、具体的なプランに移る。

3. 「インタープリターの必要性」

昔ながらの生活スタイルを守り続けている人たちは、地道で着実な行動を続けているということであり、そんな生活から生み出される性格は謙虚で控えめ、他人の目に付くような行動には躊躇する性質を含んでいる。一方、ガイドに必要とされる要件の中には集団として訪れる人たちに対して地域の特性や伝統技術を説明し、時にはエコツーリズムの理念からそれた人たちに理解を求める対応もケースに合わせて処理する能力が求められる。また、自然環境を訪れた人々の地域との違いを悟り、双方向性のコミュニケーションを行って知的欲求を喚起し、成功を呼び起こすという高い能力が求められる。

4. 「インタープリターの積極的な養成」

(株) 南信州観光公社が「自然塾」を行っており、平成14年度から開いた森林環境インストラクター養成講座を発展させたもので、森林に興味を抱き、知識を深めるところから、これをガイドとして伝える術を身に付け、森林インタープリターとして立ち立させようというものである。16名ほどの受講者で、地域の森林の諸相を研修しており、実際のツアー現場でガイドを行なう力量をもつ者も生まれてきている。また、広域的な取り組みとして「NPO法人ふるさと南信州緑の基金」(小林天心理事長)が地域ガイドとなる「インタープリター養成講座」を開講している。なじみのない「インタープリター」という言葉を理解していただくために「自然の素晴らしさや環境の状態を分かりやすく解説、理解を深めてくれる自然と人間との通訳」「旅行者に分かりやすく田舎の環境を説明する人」など言葉を置き換えて、受講生を募集した。

2006年(平成17年)1月から3月にかけて計10回の開講で、小林天心理事長や体験教育企画の藤沢安良代表、各体験プログラムのインストラクターが講義した。受講生は延べ300人。一回の講義は3時間に及び、エコツアーへの理解やプログラム化、ガイドのルール、マーケティングなど内容は多岐、詳細にわたり、将来的に地元の自然を活用したエコツアーの担い手として研鑽を積んだ。また、職業として成立することまで視野に入れた実践的な内容となった。

【エコツーリズムへ向けての将来展望】

1. 「地道な啓発活動の持続」

飯田市および周辺のエコツーリズムは、先にも述べたように地元の人々の「あらゆる日常」がテーマである。環境省が述べているように20年、30年という長期的な展望、計画、実行が必要になり、これを持続させるためには、直接的にエコツーリズムに関わる人はもとより、間接的に関わる市民にも何らかの“恩恵”が極めて重要視される。まずはエコツーリズムを理解している立場の人々が言葉や文字、映像等で認識を広める必要がある。そして、知識を持たない人たちに「あらゆる日常」をエコツーリズム的な観点で再認識していただき、「自分ができること」を模索してもらおう。それぞれの生活圏内で核となる組織をつくり、関係者の指導や補助も受けながら具体的な事業への展開を図る。

長期的な持続を図るには、まず、各地から訪れる側の満足感や喜びの表情、言動を直に受けることから始まり、金額の大小に関わらず経済的な潤いが見込まれる状況を確立する。徐々に効果を膨らませて行く必要がある。

2. 「総合的な地域基盤の拡充と観光資源の潜在性」

当地域は、飯田市の「地域経済活性化プログラム2006」でも述べているように、2003年(平成15年)度だけを見ても「地域産業からの波及所得総額1,551億円」を「地域全体の必要所得額3,562億円」で割った「経済自立度」は43.5%で、所得水準が県内他市の水準に比べても低く推移しており、所得水準の引き上げは住民の念願でもある。他の多角的見地からの政策はもちろんだが、エコツーリズムから派生する「地域の連帯」や「心の潤い」という精神的な満足感とともに「地域経済の活性」「個人の所得増」といった実現につながるものが事業の永続につながるひとつの手立てである。

報告書内の冒頭で飯田市や周辺地域の観光資源についてふれているが、歴史や文化のバックボーンが存在し、それに伴う民間の研究会や友の会、サークル、地域活性化組織をあげるなら枚挙に暇がない。これだけ市民活動の頻繁な地域は他に例を見ないと言っても過言ではない状況がある。これまで地域の人たちは地元の発展を願い、さまざまな取り組みを展開してきた。しかし、小さな満足感に終始する傾向も見られた。エコツーリズムが普及、拡大することによって地域が持つ潜在的価値が広く認められ、その取り組みが広く全国に波及することを願わずにはいられない。

3. 「振り返りからはじまる飯田型ツーリズム」

飯田市に大規模な観光地は存在しない。現状では他の地域と比較して特段に秀でた人的な観光資源もなく、人の心をとらえるような町並みが存在するかといえば皆無であり、心くすぐるようなイベントが多いかといえば閉口する時もある。飯田市にあるのは、言い尽くされた表現だが、豊かな自然とそこにはぐくまれた文化や風土である。地元の人たちはただひたすらに自己の生活のために生きているが、時代は変遷して、どこでも画一化した都市化が進むようになり、田舎の暮らしが貴重になっている。人は無いものに価値を求めて東奔西走するが、“陸の孤島”として取り残された当地域の現状自体が他地域の人の心を癒す価値を秘め、胸を張って自慢できる観光資源につながりはじめた。

しかし、この価値に気づいている地元の人たちは極わずかで「灯台もと暗し」の状況である。既存の観光とは形態が違っているので、まずは地元の人たちに当地域の価値を認識していただく意識づくりが重要になっている。また、観光の重要性を訴えるのは観光にかかわり、経済的な潤いを知る観光関係者に限られている。しかし、私たち市民にとっては特段の価値も見出せないようなごく普通の暮らしこそが、

他地域の人には価値がある訳であり、来る側のニーズと受け入れる側のニーズを両立する更なるシステムづくりが必要になる。

4. 平成18年度の取り組みと展望

飯田市が「エコツーリズムモデル事業」の推進モデル指定都市に選ばれて2年が経過した。当市はエコツーリズム概念の基となる「体験型旅行」や「農家民泊」などのいわゆるグリーンツーリズムの成功先進地として全国から注目を浴び、精力的な取り組みを展開している実績もある。しかしながら「エコツーリズム」という理念の普及は始まったばかりであり、2年間をかけて住民意識の高揚を図る一方で、具体的な事業の展開を始めている。

当市のエコツーリズムは地域全体の生活、文化、歴史、自然、民俗と言った日常が、その題材になる。住民が取り組むにあたっては「やる気」「モチベーション」の持続など、意識づくりが最重要課題であり、少子・高齢化・経済不況など深刻な状況に暮らす住民が「自らの地区の将来」を考え、その課題解決に向けて模索していた時期とも重なり、エコツーリズムと認識した上での取り組みの芽が育まれつつある。

従来から行なわれている「施策押し付け型」の手法と違い、生活に根づいた活動を展開するために各地域の現状に併せて住民自身が模索、検討、計画、実施しなければならず、必ずしも「他地域で行なわれている成功事例の導入が個々の地域の成功に当てはまる」という訳ではない。逆に言えばその地域独自のオリジナリティーが必要とされる訳で、住民の取り組みの結果から次の必要性や可能性を探る、いわば時間の掛かる事業の連続であり、その理想実現までは多大な時間を要する。幸い、相当の意欲を持つ住民個人、グループが当市には点在しており、「エコツーリズムモデル事業」を通して、その点が線、さらには面へとつながり始めている。

当市では、NPO法人ふるさと南信州緑の基金が、来訪者に対して地域の魅力を存分に伝えるガイド役「インタープリター」の養成や、平成18年度からは地元地主の協力も得て広大な山林に桜を植樹することによって新たな観光資源を後世に伝えようという「笠松山麓全山桜構想」を精力的に展開する。また、(株)南信州観光公社ではこれまでの体験プログラムの更なる充実を実施していく。さらに「エコツーリズムモデル事業」に関わる各地域では、活動の核となる「ビジターセンター」設置の具体化や上村や南信濃の南アルプス山麓一帯に点在し、延々と息づく樹齢1000年前後のエノキ、ウラジロモミ、コガキなどの「巨樹・巨木マップ」作成のための踏査など、官、民、団体が三位一体となって事業に取り組む。それぞれが「本当にいいもの」だけを抽出して提供したいという信念で事業に関わっており、事業最終年度の集大成に向けて着実な歩みである。

因みに南信濃の朝一番の空気、上村下栗地区から展望する南アルプスの山々の素晴らしさは、その場に立つだけでも幸福感に包まれる。そこに根づいた民俗文化、住民の暮らしぶりに触れることは現代社会が抱えた様々な「病み」を解消するひとつの手がかりにもつながり、今後の人的交流の先駆けにつながると信ずるものである。